

# シンボリック相互作用論の方法論的立場

## The Methodological Position of Blumer's Symbolic Interactionism

桑原 司

Tsukasa Kuwabara

### 1. シンボリック相互作用論の社会観

いわゆる、シカゴ・ルネサンスの一翼を形成する、ハーバート・ブルーマー (Blumer, Herbert George, 1900–87) のシンボリック相互作用論 (Symbolic Interactionism) が、T.パーソンズを中心とする構造－機能主義社会学や、G.A.ランドバークを中心とする社会学的実証主義 (操作主義) を批判し、それに代わる分析枠組や研究方法を発展させようとしたことは良く知られている。とりわけ、その分析枠組に関しては、これまでわが国の研究においては、それが提示する「動的社会」観が高く評価されてきた。すなわち、社会というものを、「主体的人間」によって形成・再形成される「流動的な過程」ないしは「変動的」「生成発展的」なものと捉える、そうした社会観が高く評価されてきた<sup>\*1</sup>。

本論は、ブルーマーのシンボリック相互作用論が持つ、分析枠組と研究方法というこの2つの側面のうち、主として、後者の側面に焦点を当て、論を展開しようとするものである。

先に筆者ほかは、シンボリック相互作用論に関するブルーマーの言説を素材として、その分析枠組について詳細な検討を試みた。より具体的には、以下のような問いを立て、その問いに答える、という形でその検討を行った<sup>\*2</sup>。すなわち、1) シンボリック相互作用論において、個人の「社会化」(socialization) とは、如何なるものと把握されているのか、2) シンボリック相互作用論において「社会」(society) とは、如何なるメカニズムを通じて、その個人 (個々人) により、形成されてゆくものと捉えられているのか、3) また、そうした社会が何故に再形成されてゆくものと捉えられているのか。こうした問いに対して我々は、ブルーマーのシンボリック相互作用論を素材として1つの回答を提示しようとした。以下、その内容を要約的に提示しよう<sup>\*3</sup>。

---

<sup>\*1</sup> 船津 衛, 1976年『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣; 2011年『自分とは何か』恒星社厚生閣 [http://gyo.tc/IHzB], 186–95頁。

<sup>\*2</sup> 桑原 司・油田真希, 2011年「シンボリック相互作用論序説」『研究論文集——教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集——』第5巻第1号 [http://karn.lib.kagoshima-u.ac.jp/handle/123456789/6756]; 桑原 司・木原綾香, 2012年「シンボリック相互作用論の根本問題」『研究論文集』第5巻第2号 [http://karn.lib.kagoshima-u.ac.jp/handle/123456789/6757], 62–3頁; 木原綾香・桑原 司, 2012年「社会問題研究とリアリティ」『研究論文集』第6巻第1号 [http://hdl.handle.net/10232/14859]。

<sup>\*3</sup> 以下、特別の断りのない限り、「その内容」に関する叙述は、桑原・油田 (2011: 1–8) に基づいている。

まず、1) について答えるならば、ブルーマーにおいて個人の社会化とは、個人が「他者たちの集団」(groups of others)より、「定義の諸図式」(schemes of definition)と「一般化された諸々の役割」(generalized roles)という2つの「パースペクティブ」(perspective)を獲得し、そうしたパースペクティブに、自らの解釈・定義を方向付けられること、と捉えられている。こうした社会化を経た個人(個々人)は、「自己相互作用」(self-interaction)ないしは「自分自身との相互作用」(interaction with oneself)という営みを通じて、自らが対峙する世界(「現実の世界」(world of reality))との間に、ある一定の関係を取り結ぶ。この「ある一定の関係を取り結ぶ」営みこそ、ブルーマーにおける「行為」(action)(「個別行為」(individual act))であった。個人は自己相互作用を通じて現実の世界を解釈し定義する。そうした解釈・定義が、その個人と現実の世界との関係を設定する。とはいえ、ブルーマーにおいて、その「関係」が、人間による現実の世界に対する一方向的な解釈・定義によって決定されるものと捉えられているわけではない。なぜなら、解釈・定義されるその世界、すなわち現実の世界には、いつでもそうした解釈・定義に対して「語り返し」(talking back)してくる可能性が存在するものとされているからである<sup>\*4</sup>。上記の「行為」が、その個人と他者(ないしは他者たち)との間でとり行われている場合、それは「社会的相互作用」(social interaction)と呼ばれる。こうした社会的相互作用は、「非シンボリック相互作用」(non-symbolic interaction)と「シンボリックな相互作用」(symbolic interaction)に大別され、後者のシンボリックな相互作用を通じて形成されるのが、「社会」より正確には「人間の社会」(human society)であった。

次に2) について答えるならば、ブルーマーにおいて「人間の社会」とは、「ジョイント・アクション」(joint act/joint action)(=「トランザクション」(transaction))が折り重なったものと捉えられているが、そのジョイント・アクションとは、シンボリックな相互作用の「本来的形態」(real form)としての「有意味シンボルの使用」(use of significant symbols)と等置される社会的相

<sup>\*4</sup> 筆者はこれまで、ブルーマーにおけるこうした「個人と世界の関係」把握の確立を、1977年以降のことと判断してきた(桑原 司、1996年「ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論再考——主観主義を超えて——」東北社会学会『社会学年報』第25号、88-92頁)。とはいえ、1965年の段階には既に確立していた、ということ、またその認識論がW.リップマンの『世論』(1922年)におけるそれと近似していること、この興味深い2点を示唆する文献がある。次を参照されたい。高根正昭、1979年『創造の方法学』講談社、55-6頁。なお、ブルーマーのこうした「個人と世界の関係」把握は、ブルーマーのみならず、ブルーマーが属していた「社会学のシカゴ学派」全体に広く共有されていた考え方である。次を参照のこと。皆川満寿美、1989年『社会過程の社会学——ヒューズ』片桐雅隆編『意味と日常世界——シンボリック・インタラクシオニズムの社会学——』世界思想社、62-4頁。

相互作用のことを表していた<sup>\*5</sup>。こうした意味での「社会」は、その形成に参加する個々人が、各々、自己相互作用の1つの形態としての「考慮の考慮」(taking into account of taking into account)を行うことにより、互いに「相手の観点」と「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」という2つの「観点」を適切に把握することにより可能になるものと、ブルーマーにおいては捉えられていた。またそうした適切な把握を可能にするのが、先述の社会化の過程を通じて獲得された「定義の諸図式」と「一般化された諸々の役割」という2つのパースペクティブの使用であった。では、何故にこうした「社会」が再形成されるものと捉えられなければならないのか。

3) について答えるならば、その論理的必然性は次のように説明される。すなわち、社会がある一定の形態を保ち続けるためには、そこで用いられている「共通の定義」(common definitions)が永続的に維持され続けなければならないが、共通の定義が維持され続けるためには、身振りを提示している人間は、その身振りが向けられている他者を、ある一定の見方でその身振りをしている他者として解釈・定義し、かつそうした解釈・定義が妥当なものであり続けなければならない<sup>\*6</sup>、という条件が必要となる。とはいえ、それを不可能にする特性が「他者」という存在にはあった。他者の「ブラック・ボックス」性(black boxness)がそれに他ならない。

## 2. 「感受概念」としての社会観

前節までの記述は、ブルーマーのシンボリック相互作用論の分析枠組(=パースペクティブ)から捉えた「動的社會」観の内実であるが、極言するならば、「シンボリックな相互作用としての社会」(society as symbolic interaction)<sup>\*7</sup>というブルーマーのよく知られた表現からも分かるように、ブルーマーにとって「社会」とは、まず何よりも、人々の中の社会的相互作用(その本来的形態がトランスアクションでありジョイント・アクションであった)が通時的・共時的に<sup>\*8</sup>折り重なり

<sup>\*5</sup> この記述からも分かるように、ブルーマーにおいて「シンボリックな相互作用」という相互作用類型は、さらに2つの類型に分けることができるものと捉えられなければならない。すなわち、<<未だ「有意味シンボル」が成立していないものの、社会的相互作用に参加している個々人が、各々自己相互作用の営みを通じて、有意味シンボルを成立させようとしているシンボリックな相互作用[「本来的形態」の状態になりつつあるシンボリックな相互作用]>>と、<<成立した有意味シンボルを媒介として行われる「有意味シンボルの使用」と同義のものとしてのシンボリックな相互作用[「本来的形態」の状態にある]>>、という2つのタイプの社会的相互作用が、この「シンボリックな相互作用」という概念に内包されているものと考えられなければならない。なお、前者の社会的相互作用が、那須 壽の言う「いまなりつつある社会」に、後者の社会的相互作用が「いまある社会」に相当するものと思われる。次を参照のこと。那須 壽、1995年「意味・シンボル・相互作用」船津 衛・宝月 誠編『シンボリック相互作用論の世界』恒星社厚生閣、97頁。

<sup>\*6</sup> cf. Blumer, H.G., 1993, L.H.Athens (ed.), Blumer's Advanced Social Psychology Course, *Studies in Symbolic Interaction*, 14, p.179.

<sup>\*7</sup> Blumer, H.G., 1969, *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Prentice-Hall, pp.78-89. (後藤将之訳、1991年『シンボリック相互作用論——パースペクティブと方法——』勁草書房、101-15頁。)

<sup>\*8</sup> この点については、次の論稿が示唆に富む。内田 健、1996年「ミクロ・マクロ問題」早稲田大学人間科学部『人間科学研究』第9巻第1号、105-6頁。

連なったものとして捉えられていた。したがって、ブルーマーのシンボリック相互作用論においては、こうした社会的相互作用は、社会の基本的単位に他ならず<sup>\*9</sup>、それ故に、その基本的単位である社会的相互作用（トランスアクション／ジョイント・アクション）を研究すれば、「人間の社会」（human society）というものが持つ、それ特有の性質が明らかになる。これが、ブルーマーが、シンボリック相互作用論という立場から立てた社会に対する仮説であった。

ストラウスらによれば、「社会的相互作用」という現象を、如何に捉え如何に説明するかという問題は、社会学にとってきわめて重要な問題であり、M.ウェーバー、W.I.トーマス、T.パーソンズ、E.ゴフマンという名だたる社会学者たちの名を挙げるまでもなく、社会学の巨匠たちは、皆この問題に取り組んできたという<sup>\*10</sup>。彼らによれば、こうした社会的相互作用を論じる上で最も基本的な問題とは、「相互作用を行っている人々が、どのようにして、相手と自分自身の双方を相互作用者として定義するに至るのか、また相互作用の進展につれて、必要に応じて、どのように再定義してゆくのか、という問題」<sup>\*11</sup>である。ストラウスらの言う、こうした「最も基本的な問題」に照らした上で、前節で提示した知見を再構成するならば、それは次のように捉えられよう。すなわち、社会的相互作用とは、そこにおいて、互いに相手がブラック・ボックスとなっている個々人が、各々の自己相互作用の一形態としての「考慮の考慮」を駆使しつつ、互いに「相手の観点」と「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」の双方を探り合う（定義し合う）過程である、と捉えられる。すなわち、そこにおいて、個々人は、「考慮の考慮」を駆使しつつ、相手がどのような観点を持った存在であるのか（「相手の観点」）、また相手から見て、自分自身はどのような観点を持った存在と捉えられているのか（「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」）という、この2つの事柄を絶えず想定（解釈・定義）し合わなければならない、そうした過程として社会的相互作用を把握することが出来る<sup>\*12</sup>。また互いに相手がブラック・ボックスとなっているが故に、必然的に個々人は再定義を余儀なくされるのであり、それ故に、その社会的相互作用は絶えず進展を余儀なくされる。これが、われわれが、ブルーマーのシンボリック相互作用論を素材として得た社会的相互作用把握であった。

ところで、ブルーマーのシンボリック相互作用論より得たこの社会的相互作用把握は、彼の方法論においては「感受概念」（sensitizing concept）の範疇に入るものであり、それ故に、当然ながら

<sup>\*9</sup>よく誤解される点であるが、ブルーマーのシンボリック相互作用論において、社会の構成要素とされているのは、個人（個々人）それ自体ではないし、またそうした個々人が形成する個別行為それ自体でもない。あくまで「社会的相互作用」こそが——より正確にはジョイント・アクションこそが——、彼の分析枠組における「社会の構成要素」なのである。

<sup>\*10</sup>Glaser, B.G., and A.L.Strauss, 1965, *Awareness of Dying*, Aldine, p.9.（木下康仁訳、1988年『死の Awareness ナス理論と看護——死の認識と終末期ケア——』医学書院、9頁。）

<sup>\*11</sup>Glaser and Strauss (1965: 16=1988: 16)。

<sup>\*12</sup>ブルーマーのこうした社会的相互作用把握は、その後、A.L.ストラウス等、T.J.シェフ、そしてN.ルーマンの社会システム理論に継承された。次の論稿を参照されたい。桑原 司、1998年『「考慮の考慮」と情報の駆け引き』東北社会学会『社会学年報』第27号、163-4頁；2002年「相互行為と合意」伊藤 勇・徳川直人編『相互行為の社会心理学』北樹出版、73-9頁。

この相互作用把握は、そこより演繹的に理論を構成してゆくその前提として自明視・絶対視されるべきものではなく、その妥当性を個々別々の経験的世界の個々別々の事例に照らして、そうした個々別々の事例が持つ、個々別々の独自性を引き出すという形で、検証されなければならないものとなる<sup>\*13</sup>。ブルーマー自身も言うように、この社会的相互作用把握は、経験的な検証にかけられ、その経験的妥当性の如何が問われなければならない。もしその妥当性が証明され得なければ、この社会的相互作用把握に固執することは許され得ない<sup>\*14</sup>。

上記の社会的相互作用把握が、感受概念の範疇に入るものである以上、それは経験的な研究を通じて、別言するならば、ブルーマーの言う、「自然的探求」(naturalistic inquiry)を通じて、更なる洗練をはかれなければならない。では、自然的探求とは如何なる研究手法のことを意味しているのか。そのことについて、以下、議論を進めていきたい。

ブルーマーのシンボリック相互作用論は、3部構成をとっている。そのことについて、ブルーマーは、彼の主著『シンボリック相互作用論』(1969年)の第1章「シンボリック相互作用論の方法論的立場」の冒頭において、次のように述べている。

「私の〔本書第1章における〕論述方針は、まず最初に、シンボリックな相互作用の特性を素描し、次に経験科学における方法論的な原理を明らかにし、最後にシンボリック相互作用論の方法論的立場を明確にすることである」<sup>\*15</sup>。

第1章第1部「シンボリックな相互作用の特性」においては、シンボリック相互作用論の立場に立つブルーマー<sup>\*16</sup>が、研究対象としての「経験的世界」(empirical world)を分析する際に用いる分析枠組、ないしはシンボリック相互作用論の「ルート・イメージ」(root images)に関して議論がなされている。本論前節において提示したのは、まさにこのルート・イメージの内実であった。続いて第2部「経験科学における方法論的な原理」においては、「経験科学」(empirical science)を志す者なら、誰もが遵守しなければならないとする経験科学の要諦に関する議論、ならびにその要諦から導き出された経験科学の理想的な研究手法としての「自然的探求」法について議論がなされている。最後に第3部「方法論的オリエンテーション」(シンボリック相互作用論の方法論的立場)においては、もし研究者がシンボリック相互作用論のルート・イメージを分析枠組として採用し、その上で自然的探求を行うとすれば、その研究者は如何なる方法論的立場に立つことになるのか、そのことについて議論が展開されている。

この3つの構成のうち、第1部の内容については、前節に提示したとおりである。以下では、ま

<sup>\*13</sup> Blumer (1969: 148-9=1991: 192-4).

<sup>\*14</sup> Blumer (1969: 49=1991: 62).

<sup>\*15</sup> Blumer (1969: 2=1991: 2).

<sup>\*16</sup> 一般に、ブルーマーが「シンボリック相互作用論」(Symbolic Interactionism)という言葉を造語したのは1937年 (Blumer 1969: 1=1991: 76)、その立場を自らの立場として明確に打ち出したのが1969年だとされているが、その萌芽は1931年発表の「概念なき科学」(Blumer 1969: 153-70=1991: 200-23)に既に認められる、とする見解もある。次を参照のこと。那須 壽, 1985年「社会運動論再考のために——H・ブルーマーの集合行動論をめぐる——」早稲田大学社会科学研究所『社会科学討究』第30巻第3号, 231-2頁; 植村貴裕, 1989年「大衆の社会学——ブルーマー」前掲『意味と日常世界』, 92頁。

ず、第2 部の内容について議論を展開してゆきたい。

ブルーマーによれば、「経験科学」の一領域を構成するシンボリック相互作用論は、その方法論的なスタンスとして、まず何よりも「経験的世界」の特性を尊重しなければならない<sup>\*17</sup>。ここで経験的世界とは、研究対象である行為者たちによって営まれている「人間の集団生活」(human group life)、ないしは、そうした行為者たちによる「集合的活動」(collective activity)のことを意味し<sup>\*18</sup>、それは必然的に研究者の外部に位置する領域の事象を意味する。そして通常、研究者は、こうした世界を「よく知らない」ところから研究を始めることになる<sup>\*19</sup>。であるにも関わらず、研究者は通常、「人間が一般的にそうであるように、自分自身が抱いている既存のイメージの虜である」が故に、「他者〔＝研究対象〕もまたある特定の対象を、自分すなわち研究者が見ているのと同じように見ている、と想定してしまう」傾向がある。それ故に研究者は、「こうした傾向を防がなくてはならないし、自らが持つイメージを自覚的に検証するという作業を優先的に行わなくてはならない」とブルーマーは述べている<sup>\*20</sup>。それを行う手法として、ブルーマーが提示しているのが、自然的探求法に他ならない。ブルーマーによれば、この手法は「探査」(exploration)と「精査」(inspection)という2つのステップからなる。

まず探査とは、研究者がこれまで馴染みのなかった研究対象の諸側面を、「身近に幅広く知る」段階を指す。ブルーマーによれば、「探査的研究の目的は、条件が許す限り、研究領域についての包括的で正確な像を、十分に描き出す」ことにある<sup>\*21</sup>。つまりこの探査とは、データ収集と収集したデータに基づく社会像の構築、という2つの行程を意味する。またこの段階において、いわゆる「ヒューマン・ドキュメント」(human documents)が援用されることとなる<sup>\*22</sup>。すなわち、トーマスとF.ズナニエッキが、その大著『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』において用いた、インタビュー録、参与観察を通じた聞き取り、個人の生活史、手紙、日記などの「質的データ」が用いられることとなる<sup>\*23</sup>。

次に精査とは、ブルーマーによれば、「分析のために用いられるあらゆる分析の要素(analytical

<sup>\*17</sup> Blumer (1969: 60=1991: 76).

<sup>\*18</sup> 換言するならば、「人間が絶えず経験し行うこと、すなわち活動することによってのみ存在し続ける」領域が、ここで言う「経験的世界」である(那須 壽, 1983年『『意味の社会学』序説——H・ブルーマーの社会学理論を主たる素材として(その1)——』『新潟大学教育学部紀要』第24巻第2号, 407頁)。

<sup>\*19</sup> Blumer (1969: 36=1991: 46).

<sup>\*20</sup> Blumer (1969: 52=1991: 66).

<sup>\*21</sup> Blumer (1969: 42=1991: 53).

<sup>\*22</sup> Blumer (1969: 118-9=1991: 153-5).

<sup>\*23</sup> ブルーマーの整理によれば、トーマスとズナニエッキが用いたヒューマン・ドキュメントは、「手紙」、「生活史(特に自伝)」、「身近な新聞記事」、「裁判記録」、「社会機関の記録」の5つに分類される。次を参照のこと。Blumer, H.G., 1979, *Critiques of Research in the Social Sciences: An Appraisal of Thomas and Znaniecki's "The Polish Peasant in Europe and America,"* Transaction, p.29.(桜井 厚訳, 1983年『生活史の社会学』御茶の水書房, 175-6頁。)。なおブルーマーは、これらのドキュメントが、上記の「探査」の段階においては有効なものとなり得ることを認めつつも、以下に説明する「精査」の段階においては、限りなくその手段とはなり得ないことを指摘している(Blumer 1979: 75-81=1983: 220-5)。

elements) の経験的内容に関する、鋭く焦点を定めた検討であり、同様の検討を分析の諸要素間の関係についても行う」ことを意味する<sup>\*24</sup>。すなわち、この段階において、先の探査の段階において構築された社会像（研究対象となる社会についてのイメージ）の徹底した検証が行われることになる<sup>\*25</sup>。

人間は、現実の世界を<<ある一定のイメージ>>（パースペクティブ）を通してしか捉えることは出来ない。このことは、科学者一般、そして社会の研究を行う研究者（社会学者、社会学者）の場合も例外ではない。研究者もまた、研究対象となっている経験的世界をありのままに捉えることは出来ない。必ずある一定のパースペクティブ（社会像）を通してしか、それを捉えることは出来ない。だからといって、研究者は自らのパースペクティブを自明な公理のごとく捉えて良い、ということにはならない。まして、自らが抱いているパースペクティブに無自覚であることは、なおのこと許されない。研究者には、絶えずそのパースペクティブを、経験的世界の観察を通じて捉え返し続けていく、そうした姿勢が必要とされる。これがブルーマーの「自然的探求」論（「探査」と「精査」）の枢要点である<sup>\*26</sup>。

科学者が用いるパースペクティブは、一般に「概念」（concept）と呼ばれている<sup>\*27</sup>。科学（社会科学）の一領域を構成する社会学にも数多の概念が用意されているが<sup>\*28</sup>、ブルーマーは上記の自然的探求において用いる概念として、「感受概念」（sensitizing concept）を推奨する。

感受概念とは、「経験的事例にアプローチする際に、何を考慮すべきかとか、その事例に如何にアプローチするかについてのたまかな感触を与え」、研究対象である経験的事例に接近するための指針を、それをを用いる研究者に与える、という役割を果たす概念を指す<sup>\*29</sup>。

かねてより、ブルーマーの提示する上記の「感受概念」という概念については、わが国においては、主として船津 衛によって、「それ自体、一定の基準や属性を持たず、ただ一般的な方向を示すだけのものであるが、しかし現実に対し、十分な柔軟性を持つものであり、したがって、具体的現実への接近を大いに可能とするもの」<sup>\*30</sup>であると描写され、ややもすると、感受概念とは、シンボリック相互作用論者以外の社会学者が用いている概念とは異なった、シンボリック相互作用論独自の、あるいは特別製の概念のことを指すかのごとく考えられてきたが、ブルーマーがその例とし

<sup>\*24</sup> Blumer (1969: 43=1991: 55-6).

<sup>\*25</sup> Blumer (1969: 46=1991: 58).

<sup>\*26</sup> すなわち、「社会学的研究はすべて、社会的世界に関するア・プリオリな像を認識の枠組として遂行されざるを得ない・・・だが、認識対象に関するそうしたア・プリオリな像は、後続の経験的研究によって獲得されるはずの社会的世界像をあらかじめ決定するものであってはならない」（那須 1983: 405-6）。

<sup>\*27</sup> ブルーマーにおいては、パースペクティブと「概念」とは、同義のものとして用いられている。ブルーマーは、人々が日常的に用いるパースペクティブを「常識的概念」（common-sense concept）と、科学者が学術研究に用いるパースペクティブを「科学的概念」（scientific concept）と呼んでいる（cf. Blumer 1969: 160=1991: 209）。

<sup>\*28</sup> cf. 桑原・油田（2011: 3 [注5]）。

<sup>\*29</sup> Blumer (1969: 148=1991: 192).

<sup>\*30</sup> 船津（1976: 71）。

て、「文化」、「制度」、「社会構造」、「モーレス」、「パーソナリティ」、「集団」\*<sup>31</sup>、「文化遅滞」\*<sup>32</sup>、「社会化」\*<sup>33</sup>、「社会解体」といった概念を挙げているところからも分かるように\*<sup>34</sup>、それは、「ある概念のいわば性格づけ、ないしは使用法」\*<sup>35</sup>の特殊性を表す言葉なのである\*<sup>36</sup>。

さて、こうした2つのステップからなる自然的探求法が含意することは、ブルーマーによれば、「研究の指針となる概念と経験的観察との絶え間ない相互作用」(*continuing interaction between guiding ideas and empirical observation*)である\*<sup>37</sup>。換言するならば、自然的探求とは、経験的な観察を通じて、絶えず、研究者が研究対象について抱いているイメージないしは認識を、検証・改定してゆく営みを意味している。では、研究者は如何にして、そうした検証や改定を行うことが出来る、とブルーマーは捉えているのであろうか。換言すれば、研究者は如何にして、自らのイメージないしは認識が妥当なものであるか否かを知ることが出来るものと捉えられているのであろうか。ブルーマーはそれを、研究対象である「経験的世界」から研究者のイメージや認識に対して向けられる「抵抗」(*resisting*)ないしは「語り返し」(*talking back*)\*<sup>38</sup>を手がかりとしてなされ得る、としている\*<sup>39</sup>。

以上のプロセスを通じて、「経験的世界」が「生来的にもっている進行中の性格」(*natural ongoing character*)を捉えようとするのが、自然的探求の目的である。このようにブルーマーは考えている。

以上が、自然的探求論の概要である。では、研究者が、シンボリック相互作用論のルート・イメージを分析枠組として用い(第1部の内容)、その上で、上記の自然的探求を行うとすれば(第2部の内容)、その研究者は如何なる方法論的な立場に立つことになるのか。それを説明しているのが、第3部の内容であるが、その第3部において、ブルーマーが提示するその「立場」が、周知の「行為者の観点」(*standpoint of the actor*)からのアプローチに他ならない。すなわち、ブルーマーに

\*<sup>31</sup> cf.

<http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1195815/ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/19700121/phd14.jpg> ~  
<http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1195815/ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/19700121/phd15.jpg>

\*<sup>32</sup> cf.

<http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1195815/ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/19700121/phd29.jpg>

\*<sup>33</sup> cf.

<http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1195815/ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/20100918/phd13.jpg> ~  
<http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1195815/ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/20100918/phd14.jpg>

\*<sup>34</sup> Blumer (1969: 148, 154=1991: 192, 201).

\*<sup>35</sup> 那須 (1995: 45)。

\*<sup>36</sup> ブルーマーの「感受概念」論に関する我が国の秀逸な論稿として次のものが挙げられる。内田 健, 2003年「H・ブルーマーにおける『概念』の問題——感受的概念をめぐる——」日本社会学会『社会史研究』第25号。

\*<sup>37</sup> Blumer, H.G., 1977, Comments on Lewis, *Sociological Quarterly*, 18=Hamilton, P. (ed.), 1992, *George Herbert Mead: Critical Assessments vol.2*, Routledge, p.154.

\*<sup>38</sup> その一つの形態が「否定的実例」(*negative cases*)の発生である。これまで筆者は、一貫して「語り返し」=「否定的実例」の発生と捉えてきたが、第66回シカゴ社会学会研究会例会(於: 京都私学会館, 2010年12月25日)において、「語り返し」=「否定的実例」の発生と捉えるのではなく、後者を前者の一種として捉えるべきではないか、との示唆を受けた。

\*<sup>39</sup> Blumer (1969: 21-3=1991: 27-30).

よれば、上記の第1部と第2部の条件を踏まえるならば、研究者は、必然的に、その研究手法として、「行為者の観点」からのアプローチを採用しなければならないことになる<sup>\*40</sup>。

シンボリック相互作用論の立場に立つ者が、自らの分析枠組を経験的に検証する際に、研究手法ないしはその手続きの鉄則として遵守しなければならないのが、この「行為者の観点」からのアプローチである。すなわち、それは、研究者が、研究対象となる社会を、それを構成している個々の行為者の立場 (position of the actor) から捉えなければならない、とする方法論的要請であった。この点について、ブルーマーは以下のように述べている。

「方法論ないしは調査の観点から言うならば、行為の研究は、行為者の立場 (position of the actor) から行われなければならない。行為というものが、その行為者によって、その人が知覚したもの、解釈したもの、判断したもので構成されるものである以上、それを研究する者は、そこで起きている状況を、行為者がそれを見るように見、行為者がそれを知覚するように対象を知覚し、行為者にとってそれが持っている意味という観点から、その対象の意味を確定し、行為者が自らの行為を組織化するそのやり方にそくして、その一連の行為を跡づけなければならない。要するに、研究者は、行為者の役割を取得し、その行為者の観点 (standpoint of the actor) から、その行為者の世界を把握しなければならない」<sup>\*41</sup>。

以下、本論第3節及び第4節では、この「行為者の観点」からのアプローチについて詳細な議論を展開してゆきたい。かねてより、わが国の研究においては、船津 衛や宝月 誠を中心として、このアプローチの紹介は盛んになされてきたものの、それを実際に実行するに際して生じる諸問題の検討については充分になされてこなかったように思われる<sup>\*42</sup>。またそれを実際に実行するということは如何なることを意味するのか（本当に真の「行為者の観点」をありのままに把握することなど可能な営みなのか）、この点についても深い追求はなされてこなかったように思われる。次節以降では、このアプローチを実際に実行する、ということを念頭に置いた上で、詳細な議論を展開してゆくこととしたい。

### 3. 「行為者」概念の外延

シンボリック相互作用論の立場からするならば、人間の社会とは、それを構成する個々人の行為 (ジョイント・アクション) から成り立ち、そうした行為は、その個人が自己相互作用を通じて行う解釈・定義に基づいて形成されるもの、と捉えられる。それ故に、この立場から社会を研究しようとする者は、そうした個々人の自己相互作用の内奥に入り込まなければならない。換言するなら

<sup>\*40</sup> Blumer (1969: 47-60=1991: 60-77).

<sup>\*41</sup> Blumer (1969: 73-4=1991: 95).

<sup>\*42</sup> 我が国において、この問題に精力的に取り組んでいる、例外的な相互作用論者（相互行為者論者）として、伊藤 勇と徳川直人が挙げられる。例えば、次を参照されたい。東北社会学会、2001年「特集『地域調査の方法的反省』」東北社会学会『社会学年報』第30号；東北社会学会研究会、2007年「特集 シンボリック相互行為論の刷新」東北社会学会研究会『社会学研究』第82号。

ば、社会の研究は、「行為者の観点」ないしは「立場」から行われなくてはならない。これが、ブルーマーの言う「行為者の観点」からのアプローチの枢要点であった。そのことについて、ブルーマーは以下のように説明している。

「社会学者ないし人間の社会を研究しようとする者が、活動単位 (acting unit) に関心を持つ限り、シンボリック相互作用論の立場からその研究者に要求されるのは、人々 [=活動単位] がそれを通じて自己の行為を構成する解釈の過程を把握するということである。……この過程を把握するためには、研究者は、自らが研究している、行動を行っている活動単位の役割を取得しなければならない。……こうした事実を認識していたが故に、R.E.パークやW.I.トーマスといった学者の調査研究は、あれほど優れたものとなったのである。活動単位の役割を取得せずに、いわゆる『客観的な』(objective) 観察者の超然とした姿勢で、解釈過程を把握しようとすることは、最悪の主観主義 (the worst kind of subjectivism) に陥る危険を冒すことになる」\*43。

ところで、ブルーマーにおいては、上記の引用文中に見られる「活動単位」(acting unit) という概念には、人間「個人」のみならず「集団」も含まれている。そのことについて、例えばメインズらは、以下のように述べている。

「……確かにブルーマーは[個々の行為者による]意味のやりとり (transactions of meaning) を重視しているが、彼はそうしたやりとりが、あらゆる規模[の行為者間]において存在するものと捉えている。これと同じ理由で、彼が行為者に言及する際に『活動単位』(acting unit) という用語を用いていたことを指摘しておく必要がある。すなわち、行為者とは常に個人であるわけではない。それは親族でも、協同組合でも、エスニック・グループでも、国際的なカルテルや兼任役員会 (interlocking directorates) でも、それ以外の形態の集合体でもあり得る。さらに言えば、人間の活動は、さまざまな状況のなかで生じ得るが、そうした状況もまた、その規模において変化し得るのであり、対面的なもの (face-to-face encounters) から経済市場まで、さらには国際的な権力関係にまで広がるのである。……」\*44。

上記のメインズらの指摘は、以下のブルーマーからの引用によっても裏付けられる。

「人間の社会は、行為を行っている人々から構成されているものと見なされ、そうした社会の生命は、彼らの行為から構成されているものと捉えられる。[そうした行為を行っている] 活動単位 (acting unit) には、個別の個人や、その成員が共通の目的のために一緒に行為している集合体や、何らかの選挙区を代表して行為している組織 (organizations acting on behalf of a constituency) などが含まれる。……人間の社会において、経験的に観察可能な活動は、すべて何らかの活動単位から生じたものである。……現実にそくした分析をしていると主張する、人間の社会に関するあらゆる図式は、ひとつの人間の社会が、諸々の活動単位から構成されている、という経験的な

\*43 Blumer (1969: 86=1991: 112).

\*44 Maines, D.R., and T.J.Morrione, 1990, On the Breadth and Relevance of Blumer's Perspective: Introduction to his Analysis of Industrialization, Blumer, H.G., 1990, Maines and Morrione (ed.), *Industrialization as an Agent of Social Change*, Aldine, xv. (片桐雅隆ほか訳, 1995年『産業化論再考』勁草書房, 11-2頁.)

認識を尊重し、そうした認識に合致するものでなければならない」\*45。

ブルーマーによれば、この活動単位に含まれているのが、人間個人であれ集団であれ、そうした活動単位の行為は、等しく、それらが行う解釈の過程の所産と捉えられなければならない。またそれ故に、上記の引用にも見るように、そこに含まれているのが人間個人であれ、集団であれ、研究者は、その「活動単位の役割を取得」という「行為者の観点」からのアプローチを実行しなければならない。これがブルーマーのシンボリック相互作用論の主たる方法論的な主張である。とはいえ、私見では、もしこの「活動単位」に集団をも含める、とするならば、このアプローチを実際に実行する上で非常に困難な問題が生じることになる。

再度確認するならば、ブルーマーのシンボリック相互作用論は、その遵守すべき研究手法として「行為者の観点」からのアプローチをとっているが、それは言うなれば、研究者が、研究対象となる社会を構成する行為者の役割を取得し、その立場から社会を研究することをその内容とするものであった。こうした研究手法を堅持するのであれば、「活動単位」を人間個人と等置する場合には、その人間個人の役割を、そして集団と等置する場合には、その集団全体の役割を、研究者は取得しなければならないことになる。とはいえ、後者の役割取得が如何にして可能であるかについて、ブルーマーは十分な説明を用意し得ていない。ブルーマーは、J.H.ターナーとの論争のなかで、ブルーマーのシンボリック相互作用論の方法により、大規模な組織を研究することが可能であると主張し、ブルーマーの論文「労使関係の社会学」（1947年）を参照するように示唆しているが\*46、その論文の結論部において、彼は以下のように述べている。

「労使関係の分野においては、大規模で複雑な形式で観察を行わなければならない、というのは、困難なことであるが、現実にそくすためには致し方ないことである。労使関係における観察の意義と近代的な戦争における偵察の意義には相通じるものがある。自らの偵察地点にいる兵士には、その兵士の能力がどれほど優れていようとも、戦場全体で何が起きているのかを知ることは出来ない。社会学者が、ある工場で観察を行う場合にも、間違いなく同じ限界を感じることになるだろう。適切な観察を行うためには、観察者は、そのフィールドで起きていることを感じとり、さまざまな役割を取得し、さまざまな状況を判断し、そうすることを通じて、そうしたさまざまな事柄を、ある統一された形式にまとめあげるといふ、困難な作業を行わなければならない。われわれがそれを好むと好まざるとに関わらず、こうした観察が的確なものであるためには、高度な創造力を伴った研究者の判断が必要とされるのである」\*47。

この論文を通して、ブルーマーがとりわけ強調して止まないのは、工場における労使関係（労働者と経営者との関係）を研究するに際しては、研究者は、その関係が、「対等な個人と個人との関係」としてではなく、まず何よりも「企業と組合という二つの組織同士の関係」として存在してい

\*45 Blumer (1969: 85=1991: 110).

\*46 Wallace, R.A., and A.Wolf, 1980, *Contemporary Sociological Theory*, Prentice-Hall (=濱屋正男ほか訳, 1986年『現代社会学理論』新泉社, 345頁)。

\*47 Blumer, H.G., 1947, Sociological Theory in Industrial Relations, *The American Sociological Review*, 12, p.277.

る、ということに留意しなければならないということ、研究者は、そうした組織間の相互作用（＝シンボリックな相互作用）という観点から、両者（労使）の相互作用を捉えなければならないということ、この2点である。すなわち、労使の相互作用を、個人と個人との相互作用という観点からではなく、それぞれの所属する組織と組織との相互作用という観点から捉え分析しなければならない。これが、ブルーマーのこの論文の枢要点となっている。その上で、その組織の役割を、研究者が取得することは如何にして可能なのか、ということについて説明しているのが、上記の引用である。確かに上記の引用を見る限り、ブルーマーは、シンボリック相互作用論の手法による組織の分析が不可能であるとは述べていない。すなわち、「活動単位」の範疇に組織（大規模な集団）を含め、その集団全体の役割を取得することは不可能なことである、とは確かに述べてはいない。とはいえ、上記の引用を見る限り、そうした役割の取得が如何にして可能であるのかについても、ブルーマーは（少なくとも体系的には）説明を提示し得ていない。

以上の議論を踏まえるならば、研究者が「行為者の観点」からのアプローチを実際に実行するに際しては、さしあたり、その「行為者」（「活動単位」）には人間個人のみを含めるべきである、とする判断が妥当であると思われる<sup>\*48</sup>。

ブルーマーのシンボリック相互作用論のパースペクティブを用いて、経験的な研究を進めるに際しては、この「活動単位」という概念には、人間個人のみを含めるものとする。その上で、研究者は、この「活動単位」（＝個人）の役割を取得しなければならない。とはいえ、研究者による人間個人の役割の取得という営みは、一見容易い作業のように思われるが、研究者が研究対象となる個人の役割を（ありのままに）取得することなど、そもそも可能な営みなのであろうか。次節では、そのことについて議論してゆくことにしたい。

#### 4. 構築物としての「行為者の観点」

そもそも「行為者の観点」を取得する、とは如何なる事態を意味しているのであろうか。それは、ありのままの行為者の観点をダイレクトに取得することの意味しているのであろうか。本論では、最後にこの点について議論しておきたい。

仮に、AとBという2人の行為者によって社会的相互作用が営まれているとしよう。本論前節までに得られた知見を踏まえるならば、そうした社会的相互作用において、2人の行為者たちは、各々、「自己相互作用」の一形態としての「考慮の考慮」を行いつつ、互いに「相手の観点」と「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」の双方を探り合っている。シンボリック相互作用論の

<sup>\*48</sup>だからといって我々は、ブルーマーのシンボリック相互作用論はミクロ主義理論であり、マクロな分析を行うことができない理論だ、と考えているわけではない。この点については次の論稿を参照されたい。桑原 司・木原綾香、2011年「シンボリック相互作用論の根本問題」鹿児島大学法文学部紀要『経済学論集』第77号；木原綾香・桑原 司、2011年「社会問題研究とリアリティ」鹿児島大学法文学部紀要『経済学論集』第77号。

パースペクティブからするならば、社会的相互作用に参加しているAとBとは、互いに相手がブラック・ボックスの関係にあるもの、と捉えられる。そのため、研究者がそうした社会的相互作用を「行為者の観点」から明らかにしようとする際には、当然ながら、その研究者は、その社会的相互作用において、AはBの内面を、BはAの内面を、本当のところは把握しきれていない状態にある、という理論上の前提を研究方法（方法論）上の前提としても据えた上で、そうした前提に見合った調査方法をとらなければならないことになる。すなわち、ある行為者の内面はあくまでその行為者から引き出されなければならないのであり、その行為者と社会的相互作用を営んでいる相手である「他者」から引き出されるべきものではない。

とはいえ、ここで忘れてはならないことは、フィールドに調査に入る「研究者」という存在もまた、そのフィールドにおける一人の「行為者」に他ならない、という論点である。すなわち、研究者による調査研究という行為もまた、「一つの解釈の過程」に他ならず、そのため、研究者（＝調査者）と行為者（＝調査対象者）との社会的相互作用もまた、等しく「シンボリックな相互作用の範疇に入るもの」、と捉えられなければならないことになる。であるならば、研究者にとってもまた、その役割を取得しようと思っている行為者（対象者）は、「ブラック・ボックス」として存在しているものと捉えなければならないことになる。その意味で、研究者による「行為者の観点」の取得という営みは、その観点のありのままの姿をダイレクトに取得することを意味しているわけではない。そうではなく、それは、対象者の解釈過程に対する研究者の解釈過程<sup>\*49</sup>でしかあり得ない。この点について、先に筆者は以下のように指摘した。

「先に、・・・見たように、社会的相互作用において、ある個人が取得する他者の役割とは、あくまで、その個人が、そうに違いないであろうと想定した、その個人の想定する『他者の役割』であった。すなわち、そもそも、個人によるダイレクトな他者の役割の取得など不可能なものと捉えられなければならないということが、そこでは強調されていた。また、個人によるそうした想定が、いつでも正確なものであり続けることなど不可能なものと捉えられなければならないということは、・・・[既に]見たとおりである。であるならば、研究者が、他者すなわち対象となる行為者の役割を取得するに際しても、同じ問題に直面することになりはしないだろうか。すなわち、研究者が取得する行為者の役割、すなわち『行為者の観点』とは、決してその研究者にダイレクトに把握されるものではなく（換言するならば、研究者がそれをダイレクトに把握することなど[そもそも]不可能なことであり）、あくまでそれは、究極的には、研究者による対象者の観点に関する想定（ないし解釈・定義）でしかあり得ない」<sup>\*50</sup>。

では、その解釈過程の結果として、研究者が対象者に適用した、その解釈・定義（「行為者の観点」に関する研究者の想定）の妥当性はどのようにして検証され得るのであろうか。別言するならば、研究者はその「対象者の解釈過程に対する研究者の解釈過程」を如何に対自化し得るのであ

<sup>\*49</sup> 「再構築の再構築」ないしは「解釈の解釈」（徳川直人，2001年「語りの『個と共同性』」北村 寧ほか編『新世紀社会と人間の再生』八潮社，129頁）。

<sup>\*50</sup> 桑原 司，2000年『社会過程の社会学』関西学院大学出版会BookPark，80頁。

うか。先に見たように、ブルーマーは、研究者によるそうした解釈・定義の妥当性の如何を、「経験的世界」からの「語り返し」を手がかりとして検証することが出来る、としている。では、その語り返しをどう処理し、どう自らの解釈・定義を修正（→確定）すればよいのか。ブルーマーによる説明では、それが明らかにされているとは言い難い<sup>\*51</sup>。その検証のプロセスの明確化が何よりも求められている<sup>\*52</sup>。

---

<sup>\*51</sup> そもそも、ブルーマーによる方法論（自然的探究論）に関する考察は、研究者が研究対象となる経験的世界に対してどのような心構えで接しなければならないか、すなわち、研究者の研究姿勢に関する当為を説くことに力点が置かれている（後藤将之，1991年「解説：ハーバート・ブルーマーの社会心理学」前掲『シンボリック相互作用論——パースペクティヴと方法——』，305頁）。その当為と、その当為を支える「研究者と経験的世界との関係」に関する認識論。ブルーマーの議論はこの2つを論じることには終始している。具体的な調査手続きに関しては、むしろ、ブルーマーに後続する、シカゴ学派の第4世代のシンボリック相互作用論者らが展開する議論に目を向ける方が得策である。とりわけ、次を参照されたい。H.S.Becker, 1998, *Tricks of the Trade: How to Think about Your Research*, The University of Chicago Press.（進藤雄三・宝月 誠訳，2012年『社会学の技法』恒星社厚生閣。）

<sup>\*52</sup> なお本論は、先に web 上において公開した次の原稿を大幅に書き改めたものである。「経験的研究へ向けて——シンボリック相互作用論の研究手法の批判的検討——」

[<http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1195815/ecowwww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/doctor4.htm>]。